

「志士タゴール翁」

荒井寛方著「阿弥陀印雑記」より抜粋

(初版昭和十八年、再版昭和五十年アポロン社)

民族は光明を求め、青年は希望を持つ、といふ、自作の詩を高らかに歌いつつ、英国の桎梏と誅求から脱せんとした、印度愛国の志士、タゴール翁は、まさに実現とする希望と光明とを見ずして、昭和十六年の暮に逝いた。

私はタゴール家に、丸、二年寄宿して、日夜タゴールさんに接したので、私の心魂に灼きついた、此の愛国の士の一面を伝え、同時にインド滞在中の思い出を語りたい。

私がタゴール翁に招かれて印度に向かうべく日本を出発したのは大正五年の秋十月であった。話しの順序としてタゴールさんに招かれて印度へ行くまでの事情を少し述べる。最初にタゴール翁が来朝された折、横浜の原富太郎氏邸を宿とし、三ヶ月逗留され、其の間原家の所蔵品を見た中、絵画もある。所が日本の絵画は、或は襖にしろ、或は屏風にしろ、非常に大きいのに驚かれたのである。タゴール家に抱える画家はモーゴル・ピクチャーで商品ばかり画く、大きいのでせいぜい一尺八寸位のものである。大体印度では大きいものは画かない。

タゴール翁は原家の所蔵品を觀て感じる所があり、自分の率いる青年たちに大きな絵の画きかたを習わしたい希望を持たれ、絵の教師を一人雇いたいと日本美術院に申出たのである。そこで横山先生と下村先生及原さんの三人で協議する事となり、其の際原さんは曰くに「美術院同人の中から選ぶにしても、印度画を研究しているものが適任と思い、それには荒井君がよからん。」横山、下村両先生は即座に賛成され早速、私の方へ相談がある。私は十数年前より院の出品制作には殆ど仏画を題材として居り、また仏画をやる以上一度は印度へ行かなければ、というのが宿願であった。ところへ恰も良し、此の相談であるから渡りに船である。然も印度の代表的人物タゴール翁が招くというのだから、一も二もなく応じたのである。

こんな事情で私がサンチ・ニケートン（タゴール翁の率いる青年たちを教育するタゴール翁経営の学校の名）の青年に日本画の大きな画き方を教える事になり、前記大正五年の秋にカルカッタのタゴール家に向かうべく日本を立ったのである。当時第一次欧州大戦中でカルカッタ航路の便船は荷物船だけで、之に乗船しホンコン、シンガポール、ペナン、ラングーンに荷役の為寄港、約一ヶ月後にカルカッタに着いたが、初めてみる外国の風俗珍しく、もっと航海を続けたい程愉快だった。此の船には堅山南風氏も一緒であった。カ

ルカッタへ着いた其の当時タゴール翁はアメリカに行つて不在中であつたが、直ちに使命を開始して十幾人かの青年の師となる。

家族は私を非常に優遇して呉れ立派な一室を居所に与えられる。タゴール家とは別棟になつた二階建ての建物があり、是をビジットラと名付けている。是は文学、芸術、音楽、工芸の四つを研究する為の建物で、このビジットラを私の居室に与えられたのである。ビジットラはタゴール家の主家とは廊下で接続されているが、前記四つの研究する時以外、ふだんは誰も使用せぬ事になっている。

食事は家族と一緒に食堂で摂るのだが、カルカッタへ着いた夕、家族と一緒に食事がはじまる時、家人は私に、印度食がいいか、若し日本食がよければ幸いに本人のボーイを抱えてあるのでそれに作らすといわれる。

私は折角印度に來たのだから一緒に印度食を戴きたいと申出で、印度到着当初よりそんな、きっかけから滞在中はずっと印度食で通した。

印度の人々は食事をするに右手でご飯を掴み出し、練って副食物をそれに交ぜ、口に送り込むのである。送り込むのに又方法がある。指先で交ぜ、やがて中指で食物を纏め親指で捌きながら口へ入れるのであるが、其の手つき、指の動かし方が実に美感で日本人が箸を使うよりも指の美しさは優れている。自分にはそれができないから匙で食べる。匙ではいい具合に食物が交ざらず、匙のおいもつくので後には家族の真似をして指を使うようにすると、慣れるもので、二年も居中にはすっかり上手になり、是は後の話だが、家人から荒井さんはどこへ行つても印度食がやれると折紙をつけられる程になつた。

印度では食事は二食であるが、とに角、食事を共にするので、タゴールさんが不在中なれど家族と親しむ様になる。暫くして家族の人々は私が日本から携行した弱法師の絵を、適当な場所に飾って観たいといわれる。私は飾る場所をいろいろ考えた揚句、ビジットラの一室に日本座敷を即製で設えたのである。丁度日本人の大工が一人カルカッタに居たので、この大工を指図して日本流に縁を張り欄干などつけ、莫藎に縁を付け畳の感じを出し、其処へ弱法師の絵を飾って家族に干渉して頂く仕組みにしたのである。

話は前後するが弱法師の絵はタゴール翁が来朝されて原氏邸に滞留の折、原家所蔵画の弱法師を觀て非常に熱賛し所望したので、私が金屏風に模写し、日本出發間際二ヶ月ばかりを要して出来上がったのを持参したのである。

さて此の弱法師の絵を即製日本間に陳べ家族を迎えるのだが、この絵の前に立つ家族の態度がまことに靈妙詩的で、画中にまで入らんとするのか、画中から抜け出たのかと思われるほど幻覺を起さしめた。盛装して容儀を正した一族の老幼男女、三、四十人が主家から廊下を渡つてビジットラへ進む途中、皆合唱し、静々と歩を移す、やがて絵の前に一同は座して尚も合唱を続ける。其の情景は得もいわれぬ清らかな雰圍氣を醸しだし、日本よ

り遙々携えた絵に対し一同の斯の如き敬虔なる態度を見ては何んだかわからぬが感激して
了う。

一同の歌が終わると初めて絵に就いていろいろと小声で話を交わすのである。

この歌は長老であるタゴール翁の作った歌で、翁の根本思想である「すべて世の中の者の
暗い所に居て、ただ一点の巧妙を慕う」という意味の詩であり、この詩を口誦みながら絵
に接したのである。

弱法師の絵は、盲目のヨローボーシが梅の木の下で合掌している図で、梅花の綻ぶ下に
見えないながら太陽の光を求めている、この絵がタゴール翁の詩の精神に通じているので
ある。弱法師は院展で評判になった絵で下村観山先生の名作である。

私が印度へ来て半年ばかり経過した頃、タゴール翁はアメリカから戻られた。

翁が印度へ帰られた翌日にサンチ・ニケートンに行かれるというので私も御供する。一
行は大勢である。サンチ・ニケートンはカルカットより五十哩離れた場所に在る。一行の
乗った汽車が夜中十二時頃ボロップールという駅に着くと、白衣に各人炬火を輝かした学
生二百名位が翁の為に馬車一台を用意して迎える。タゴールさんが汽車から降りると、一
同はもう感激してお迎えし、直ちに印度の古い習慣の華鬘（白い花で綴った花輪）を首が
見えなくなるほど沢山掛ける。タゴールさんは児孫にでも迎へられたように満面紅潮する。
タゴールさんは馬車を退け裸足の学生と同様に裸足で歩きたいという、青年達は寄ってた
かって翁を抱へんばかりに圍繞してサンチ・ニケートンへ一里程の原っぱを行く、この光
景はタゴール翁が如何に青年を愛し、又青年は翁を神父の如くに尊敬しているかを証して
余りあり、同行の日本の客も熱腸たぎる想があった。

サンチ・ニケートンの学校近くには清掃された歓迎道路が出来、学校の前には薔薇の如
き常盤木で作った歓迎門が建ち、其の下に二尺高の土饅頭が築いてあり周囲を蓮座で彩る。
この中央にタゴール翁を上げ座らす、大勢の生徒があかあかと焚く炬火の中に、教員のお
もなるものが立ち歓迎の辞を述べる、終れば生徒は合唱し音楽を奏でる。次に翁が挨拶を
述べ、一時間余で式は終了し、翁は宿舎へ入る、それは教員と同じ宿舎で極く貧弱である。
私は別な客人用の貧弱でない家に案内された。

翌日の昼食は野天に仮食堂を設け教員の奥さんや令嬢の手によって作られた料理をご馳
走になる。翁は五寸位の小高い台に座られ、次に並んで私、右の方は教員の主席が座し、
他の者は生徒等と一緒に円座を敷いて料理を頂く。食物は大きな器に盛られたものを一品
宛、膳に別けられる、食べると次の料理が廻されるという寸法である。夜、学生の一人
が私を迎えに来る。それは今タゴールさんがお話しをしているので聞きに来いというので
ある。行ってみると林の中で篝火を焚き白衣の翁が五尺位の高さの石上に座し話の最中
である、二百余の人々が廻りに座禅を組み熱心に聴講している。話は旅行談らしいが、私は

之を目撃した瞬間、なんとも云えぬ神々しさに打たれた。愛し信じる子弟の情愛の美しさ、昔、釈尊が説教されたのは、こういう情景ではないかとの想像さえ湧いた。私はわざと近くに寄らず遠くからこの美しい光景を恍惚として眺めた。

日本に居たときタゴール翁のことはかねがね聞いている。日本でもお眼にもかかり知悉している。そして尊敬した。

印度へ来て印度でタゴール翁に逢い、タゴール翁の偉大さを如実に知った最初が以上の記述である。私はいよいよ翁を愛し、翁を尊敬し始めたのも此の時からである。

詩聖タゴールとしてタゴールの名声は世界にあまりにも有名である。もちろん詩聖であることに誤りはない。しかし一片耿々の赤心をもつ愛国の志士であることを知らなくてはタゴール翁を語れない。詩を作り歌を作り小説を書いたのも、祖国を興す手段であったことを忘れてはならない。弘法大師が仏教を布く為に絵を描き像を刻んで方便としたと同様である。

だからサンチ・ニケータンを経営し、二百余人の学生を収容し毎年幾十人かの青年を世に送り出している。こうして祖国を印度を興さんとしたのである。タゴール翁は常に曰う。「印度よ目を覚せ。」

タゴール翁は我が邦へ三度来ている。亜米利加へも英国へも渡った。そしてレクチャーをして謝礼を受け、又各国在留のインド人より其の都度、寄付金を募る、之等の金は全部、経営するサンチ・ニケータンの資金とするのである。タゴール翁の子息は相当の財産を持っているので、その方の気遣いはなく、ただ学校を盛んにする以外に余念がない。晩年に絵を描いたのも其の為ではなかったか。

タゴール翁の家は広大な三階建てで、入って出る場所を失う程広いが、其のほんの一部しか使っていられず、生活は質素である。

タゴール一家は二百人位で、一家の困った人々をこの邸に住ませている。なに分二百人からの一族で、悶着も確執も時々は起る。

一族にはマハラジャもあるが、タゴール翁が出ると悶着などはすぐに解決する。こと程一族の長老格である。信望と畏敬は一族の長者である。

常に青年を愛し、青年には希望があるという。私の住んでいるビジットラに毎週一度青年を集め、訓話をし、雑談をし、又翁の詩の朗読などもやるが、靄々たる其のさまは、他の見る目も羨ましい。

タゴール翁の父君はデベンドラナート・タゴールと言い、宗教家である。父君が或時、

布教していると、盗賊が現われて迫害をする、ところが盗賊の現われることは百も承知で来ているので、不心得を諄々と説き遂に賊を改心させた逸話もある父である。タゴールさんは其の地点を記念すべくサンチ・ニケータンを建てたのである。学校の傍の村人は改心した盗賊の子孫である。

此の宗教家を父とし、九人兄弟の末子がタゴールさんである。長兄も大文豪で其の他裁判官もあり兄弟は皆偉い人物揃いである。

タゴール家は大体バラモン族であったが後に何か不都合があつて、賊から離れた、しかし金を出せば復帰できる慣わしだが敢えて夫れをしなかったと聞く。(注 バラモン族は印度四階級の随一で王様よりも上位である。)

デベンドラナート・タゴールは非常に広大な土地を所有していて、其の管理が至難であり、整理の為長兄を遣すと、長兄も父の地を継いだ仁情の士で整理どころか反対に土民に金をやったり助けたりする始末で大いに困り父は長兄に代わってタゴールさんに整理を命じる。

タゴールさんは当時三十歳位であつたが兄弟中で適任と認められたのだろう。果たせる哉、鮮やかな整理の手腕をみせ、同時に徳望と仁政によって、土人はマハラジャ以上にタゴールさんに帰服した。そのさ中に子供二人を残して奥さんを失う。悲嘆の余り造ったのが有名な「ギタンディアリ」の詩である。

最愛の夫人の死によって人生観を新たにする。時にタゴールさん、三十五、六歳で、夫れ以後夫人を持たなかった。

タゴール翁は朝の起床が早い。毎朝私はビジトラから翁の住むところへ挨拶に出掛けると、タゴール翁は室内から私の行く姿を見て合掌して先へ挨拶される。こちらは遠くよりする挨拶は失礼と思い、いつも先じられた挨拶に恐縮した。又食事の話になるが、食事はタゴールさん、子息、子息の奥さんと私の四人で卓を囲み、タゴールさんの為に料理が常に二、三品余分につけてあるが、自分では決して食べない、必ず私に一品子息の奥さんに一品わけられる。

食事の折、タゴールさんの姉さんや孫さんが周囲に待って我々の食事を見ている。こちらは至極具合が悪い。是は印度の習慣で食事をにぎやかに愉しみます一種のご馳走なのだそう、タゴールさんの為に斯くサービスをするのである。

食後には必ずパンが出る。青い木の葉の裏に石灰様のものを付け檳榔子其の他五、六種の実を刻んだ様なものと一緒に食べる。日本式のお茶である。夫れをよく噛み下すと唾液がでて胸中が爽やかになる。印度食はカレイ料理で辛い、食事中は水を飲まぬので最後に水を飲み、パンを食べるのである、最後にボーイが水瓶を捧げて来て手を洗ってくれ、

マンゴーなど戴けば実に甘美な味覚である。

タゴールさんは、六尺豊かの偉丈夫だが、少食である。食事が終ると小声で歌を歌う、さながら自分と宇宙が同化し一体となったかの如く愉しそうに。

タゴール翁の顔は美しい。手を見ても指を見ても。声は銀鈴を振る様である。細部も全体もよく具わり人体美の極致とや云わん。挙措動作も又頗る静かである。

印度では正午から三時頃まで、室内を暗くして午睡をする。日本とは反対に外気を防ぐ為に窓を皆閉めて了う、ただ南の一方のみ開ておき、ここに植物の根を編んだ蕙を下げる、甚だ香りの佳いものである。蕙に水を浸ませる、是が室内の熱気を去るに不思議な作用をする。水蕙と同じ理屈で、室内に素焼の甕を置き之に水を満たして数時間も放置するが甕の水は熱気を去る事妙である。

翁は印度の風習の午睡を決して食らぬ。前晩は家人が寝静まってから一人屋上を逍遙として思索し、夫れを午睡の時間に纏めるのかその時分、いつもペンを走らせている。

印度では一年中蚊帳を釣るしたままで、はずさない。暑くて寝苦しい或夜の事、二、三人の青年が蚊帳にも入らず扇風機の下で眠っている、これは妙と私も真似して一夜を過ごした所、運悪く蚊に刺され、マラリヤに罹る。

マラリヤに呻吟している頃の或晩、タゴールさんが私の病床に別れの挨拶に来られる。訝しいので其の訳を訊ねると、翁曰くに、私は今夜、これからレクチャーをやる、レクチャーをやれば必ず官憲に繋がれるので当分、あなたに逢えないから挨拶に来たといわれる。夫れは大変だが、然し其のレクチャーも聴きたい、が如何せん、歩行も叶わぬマラリヤ患者の私である。タゴール翁は去って行く、私は不安な時を過ごす。数時間経つとどやどやと大勢の足音が続き騒々しい。タゴール翁がレクチャーを無事に済まして帰ってきたらしいのである。私は病褥に我慢していられず、その騒ぎの中へ行く。一人の青年に委細を訊けば、彼は興奮して言う。タゴール翁は、今夜はじめて政談演説をやった、実に一世一代の大演説であった。だが官憲はどうすることも出来ず傍観しているのみであった。演説が終わり、タゴール翁作の国歌を合唱して、散会した。というのである。当時世界大戦の最中でタゴール翁を逮捕すれば、青年が騒ぎ出す事必定で官憲も手を出し得なかったのである。

カルカッタにアネバサントと云う女傑が居た、国籍は聞かなかったが印度在住の外人である。この女傑、新聞を経営し、常に印度の後援をしていた。為に又屢々牢獄に繋がれた。一年の刑を終えてマドラス監獄を出る時、タゴールさんは女傑を迎えに出た、私も同行した。何万という印度青年の迎群の中で、女傑とタゴールさんの硬い握手を交わす光景は盛

観であった。翌日、ビジットラの大広間で再び会見があつて其の際私も女傑と握手する光栄を得た。

或時タゴールさんの子息に誘われて遊覧に出る。子息と、子息の従兄と私の三人連れである。従兄は岡倉天心先生と昵懇の間柄で印度革命家の一人である。

夜中ある駅に着きで迎えの馬車に乗り一里余行くと馬車は大きな門の前に至る。門前には二人の番兵が銃を持って立っている。門を入ると象が二、三等繋いである。なんだか不思議な王宮へでも来た様に訝しく思う中、馬車は玄関に止まる。それは豪壮な御殿であつて、驚く。

翌朝になると二人の姿は見え、家人の指図で無理矢理に玄関に待つ馬車に乗せられて了う。其の馬車は、一鞭くるとタッタと走り出し、林を過ぎて、とある大きな建物の前に止まる。馬車から降ろされた私は一室に導かれる。室内には大型のベッドが横たわっている。導いた御者は此処に居ろ、其の中に迎えに来るからと言ひ残して、帰つて了う。昨夜からの出来事を考えると、まるで夢でも見ているようで不可解でならない。

やがてボーイが朝食を運んで来たので、英語で不可解の謎を解く会話をやろうとする、所がこのボーイ、老人で英語は通じない。やむなくヒンズースタン（召使などの使う言葉）で卓上電話を指さし、テレホンを掛けたいが自分には欠け方が解らぬ、この先に学校があるようだから学生を一人連れて来いと、片言のヒンズースタンでやり、同時に連れて来る仕草なども付け加える。老ボーイは、まじめくさって仕草の真似ばかりして一向、埒がわからないのでこっちは腹が立ち、日本語で怒鳴りつけると、其の見幕にボーイは驚き飛び出して行つて、やがて学生を連れて来る。ところが学生は私に向かい、此のテレホンはかからぬと気の毒そうにいうので此処に万事を急須である。実は電話さえ通じれば息子にどうして此処へ閉じこめられたかをきけるだろうと思つたからである。

不気味の中に昼も過ぎる。ままよとベッドにもぐる。と、チクチクと針で刺す様な痛みで驚いてベッドを飛び出る。こんな場合の人間の心理状態は実に哀れなもので、不安焦燥の連続の中に異状な刺痛では、てっきり毒魑に咬まれたと、きめてしまったのだ。これはなんでもない南京虫君の御見舞いである。そのうちによやく二人が現われたので安堵する。

ここから再び馬車で或地点へ進むと、共進会場があつて群集の喚く中を会場に入り、共進会を觀て、次は劇場へ入る。吾々は上席に案内され、一人の人品賤しからぬ紳士から握手を求められる。子息の紹介のマハラジャ（王様）であつた。英国の官憲も大勢綺羅を飾り觀劇していた。帰りは又一人にされ件の怪邸に一夜を明かされ、翌朝出迎えの馬車で邸を出でカルカッタに戻り此の遊覧を終つたのだが、後で考えると怪邸の幽閉は、日本人の

私が一人同行した為、タゴールさんの子息たちは英国官憲に睨まれるのを懼れての隔離であつたらしい。

私の住むビジトラでは研究以外に催しや会合がある。

時にはカルカッタに於ける代表的人物が会合して議論に花を咲かした。弁舌に於てはカルカッタ第一という人物、科学者のボース氏等は異彩を放つ存在である。ボース氏は、マルコニーより早く無線電信を発明した人だが英官憲に押さえられたと聞く。ボース氏の化学教室では講師と聞手との間に顔が見えない装置を施してある。顔が見えては妄想が生じて両者がいったいとなれないからだそうで、印度式化学者の面目が躍如としている。

ビジトラで或時、芝居を演じた。タゴール翁の脚本で俳優はタゴール一家の人々が扮装して当り、タゴール翁も一役を買う。

劇の筋は印度を風刺したもので、老衰国があつて其の長老にタゴール翁が扮する。長老に息や娘があり、彼らの友達が長老の家に入出入りをする、友達は一見慣れ慣れしく又善良の風を装うが、家人の隙をみて、什物や財宝を、めいめいポケットに隠して知らぬ顔をきめている、中には毒牙を娘に向ける狼も居る。そういう仕草を演じる。つまり紳士面をした英国が印度のものを搦ってゆく筋である。俳優は文学、音楽、芸術、工芸の四つの衣装を付けて、タゴール翁の思想を表現し痛烈な皮肉も交えて、最後に、何ゆえ眼を覚まさぬかと叫んで幕を閉じるのである。

以上は英国の罪惡史、日本人客の暴戾英国への反感、滞印中私の胸裡に深く烙きついた二、三の小話である。

タゴール翁は常に私に語っていた。家に置く召使は悉く英国の犬であると、日本から来る私宛の手紙でさえ開封されているのだからタゴール翁周辺の警戒の嚴重なる事は推してわかる。

岡倉天心、横山大観、菱田春草諸先生などは私より十年も前にタゴール家にいて親交のあったことは周知の通りである。岡倉先生は殊に印度の為に尽力奔走され、タゴール翁の令兄の子息前記怪邸事件に同行した青年の革命家とは莫逆の友であつて革命運動を起こして遂に英官憲の為に追放退去を命じられた。岡倉先生が退去命令を受けた際タゴール家も一時危険に瀕した。夫れは一青年が革命を英国官憲に密告せんとしたからである。幸い其の寸前革命志士の剣に刺されて事なきを得た。青年志士は其の場に自害した。今、印度の神としてタゴール邸の一隅に祀られている。

サンチ・ニケータンの学校ではヨーロッパ風の学問は一切禁じている。タゴール翁の英

国への反感がわかる。

丸二年寄寓したタゴール家に別れを告げる時、タゴール翁は私に言われた。

荒井さんは私をよく知ってくれた。どうぞ日本へ帰られたら日本人で私を誤解している方々を説いて私の真の心を伝えていただきたい。総理大臣閣下（其の当時大隈侯）にも私の心持を話されたい。

岡倉先生は、アジア・イズ・ワンと申された。私も岡倉先生と同感である。最後の戦争は黄白の決戦である。今次戦争（時、大戦中）迄は英国は地球上の高位に在った。今次戦争後、英国は地球の回転する如く傾きかける、現に傾きつつある。然し段々傾き回転して必ず下位に至る時が来る。其の時、代って高位に立つ国は何処か、あなたの御国ニッポンである。今、東洋には日本という唯一人の強い兄さんがあるのみ。まづ支那という弱い弟あり次に印度という弱い弟がある。強い兄さんは弱い二人の弟を救う義務がある。

タゴール翁は日本へ帰らんとする私に以上の言葉を餞とされた。

記念の詩を所望すると、私の持つ筆をとり、

荒井さんが はじめ 私の家へ入った
帰るときには 私の心の 家に入った

という詩を書かれた。それはまた始めて取った筆と墨でもあった。

タゴール翁は大東亜戦争の勃発を知らずして昨年の末に昇天せられた。しかし聖賢の何んで十二月八日の来る日を胸中予見せぬ筈はない。

タゴール翁に朝夕、親炙した日から二十余年になるが私の臉の裡に姿と顔が消え去らぬ。造化神の鏤刻の人体美、柔和であるが意志の燃えた眸。

大東亜戦争に挙げる、わが赫々の戦果、そして、インドよ道を誤るなかれと叫ぶ、東亜の盟主の勧告に、私は思う、タゴール翁の志を受け継いだ何万の青年が、機を得て決然、起ったであろう事を。

昭和十七年師走、斑鳩の里、法隆寺阿弥陀院にて